OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言学から社会言語学へ
Author(s)	徳川, 宗賢
Citation	阪大日本語研究. 1994, 6, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

方言学から社会言語学へ

From Dialectology to Sociolinguistics

徳川宗賢

TOKUGAWA Munemasa

こういう機会を作ってくださって，感謝するとともに，面映ゆい気持ちもあります。これが阪大の教壇の最後となります。そこで，細かくない，大づかみな話をさせていただきたいと思います。

私自身のことを反省すると，自分でそれなりに考えてきたこともありました。しかしやはり，大きな流れに身をまかせながらその日その日を送ってきた，という気がします。そこで，今日はまず，方言研究，方言学の全体の流れを総括することから，話しを始めようと思います。

ここでいう方言とは，地域的な方言のことで，方言学とは，言語使用者の出身地のことばの違い，そこに視線を注ぐ研究ということになります。つまり，regional dialectのことを指し，いわゆるsocial dialectは，さしあたり触れずに話を進めることにしたいと思います。

さて，日本人がこの四つの島に住むようになって，人々が地域的なことばの違いに注目するようになったのは，当然のことですが，非常に遠い昔のことと考えられます。文献上では，『風土記』や『万葉集』に，その徴候を拾うことができます。『万葉集』の十四の巻の東歌や，二十の巻の防人歌などが，特に注目されます。

つづく平安時代は，京都の地に高い文化が興隆した時代です。しかし，平安貴族といった人達もまったく地方文化を無視していたわけではなく，この時代にすでに古典意識が育っていて，すでに分からなくなった古いことばを，地方に残る方言の中に探して，それを理解の縁とするという試みが，歌学書の中などに見られます。しかし残念ながら，当然かもしれませんが，それは方言研究といったレベルには達しておりません。また，この時代は，中央と地方の隔絶の甚だしい時代ですから，残っている文献の制

約もあり，方言に対する関心は，中央の人の側からのものしか知ることができません。

それが，時代が下って江戸時代になると，様子が変わってきます。方言研究が育っている，とはまだ言えないと思いますが，その前段階とでもいいましょうか，そういうものがいくつか見られるようになってきます。また，中央の人の関心ばかりでなく，地方の人々，各地に住んでいる人達の立場からの発言，そういう人達の作品も見られるようになってくる。

また，江戸時代には，方言に対する意識も変わってきて，いわば相対主義的な見方が目立ってきます。『物類称呼』という本がありますが，その序文に，方言の違いは，「是風土水気のしからしむるなれば，あながちに褒貶すべきに非らず。畿内にも俗語あれば東西の辺国にも雅言ありて是非しがたし。」などという言葉が見えます。

また後でも触れますが，『片言』という本が1650年に出ました。この本は，京都のことばが17世紀の中頃に至って近頃乱れてきた。最近こんなことを言う人がいるが，正しくはこういうふうに言うべきである，というようなことが，書かれています。口頭言語に関して，このような一種の標準を示そうとする作品は，当時として誠に珍しいものです。

しかし，やはり，日本における方言学，方言研究の誕生は，明治期ということになります。明治17(1884)年，三宅米吉という人が，『くにぐにのなまりことばにつきて』という文章を発表して，方言を研究すべきであるということを提唱します。来年は，ちょうど110周年ということになりますね。統一近代国家を建設するために，貧富貴賤，老若男女すべての日本人が団結して一つの日本語を使うべきである，分裂したままでは，外国の侮りを受ける，そういう危機感が当時の人にあって，方言の研究をすべきだ，という考えを打ち出したのです。いわば，日本の標準語を確立する，あるいは日本語の統一をはかるために方言を研究しよう，ということになります。いわば，健康のために病気の研究をするといった立場で，これは江戸時代と非常に違う言語観，方言観と言えると思います。方言というものは悪いものである，という考え方が発達し始めるのです。

こういう立場を根底において，1902年，文部省の中に国語調査委員会が設置され，音韻と口語法に関する方言調査が実施されることになります。そして，その結果が『音韻調査報告書』『口語法調査報告書』，そしてそれぞれの『分布図』として，発表されることになります。このあたりに，日本の方言の研究らしい研究のスタートを置くことができると思われます。"フランス言語地図(Atlas linguistique de la France)"という有名な方言分布地図があります。しかしそれは当時刊行中で，まだ完結しておりません。その点から，世界的にも非常に古いものが，この日本で発表されたということが言えると思います。

ここで，国語調査委員会がなぜ設置され，音韻や口語法に関する調査が行なわれたか，ということをもう一度確認してみるのも無駄ではないと思います。「主トシテ普通教育ニ於ケル仮名遣ノ改正及ビ標準的発音ノ参考ニ供センガ為」音韻の調査が行なわれ，「専ラ標準語制定ノ参考ニ供センガ為」口語法の調査が行なわれたのです。ちょうど1900年ですけれども，文部省は「表音的字音仮名遣い」を公布しています。当時すでに賛否両論あったわけですが，そんな状況下での調査だったのです。

口語法に関しては，この調査が終わった後，1916年に『口語法』が，そして1917年には『口語法別記』が発表されました。大槻文彦という方が中心になって進められたものですが，当時の東京の，専ら教育のある人の間に行なわれる口語を標準とする，というようなことが打ち出されています。その内容が良いか悪いかは別として，文字通り画期的な著作ということになります。そして，この『別記』においては，細目を追いつつ，各地方の方言差が論じられているのです。いわば，江戸時代の『片言』を継ぐものが，こんどは政府の手によって，しかも東京において発表されたと位置付けられると思います。

ところで，第一期調査，後で第二期の調査が行われ，その結果は結局，関東大震災で全部焼けてしまったのですが，この第一期の国語調査委員会の調査結果は，標準語の確立とは別に，その後，ずっと長い間日本の方言研究の主流となっていた方言区画論，つまり方言を目安にした日本の地域

区分論を発達させることになります。日本の本土方言を東西に区分する方言境界線が，『口語法分布図』の中からいくつも見出され，それが，『口語法調査報告書』の中にある「仮ニ全国ノ言語区域ヲ東西ニ分カタントスル時ハ大略越中飛騨美濃三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ」という有名なことばを生んだのです。

方言によって日本が東西に分割されるという客観的事実が明らかになった。そしてそのことに最初に興味を持ったのは，新村出先生であったと思われます。分布図上に現れる境界線の位置が，万葉集の東歌，防人歌の詠まれた地域を限る線と一致する，これが新村先生の関心の種子にあった，ということは，実は別の機会に述べるところがありましたが，この方言区画の問題が，標準語制定といった実生活上の問題から切り離された，アカデミックな世界で取り扱われるようになったことには是非注目しなければなりません。もっとも，新村出先生の興味は，不思議なことに一時的なものだったようで，その後深い追究は行なわれず，方言区画の議論，どのように区分するのか，その境界線をどこに定めるかなどは，その後，新村出先生の後輩にあたる東条操先生へと引き継がれていくことになります。

この方言区画の問題は，方言の問題だけではなくて，広く日本文化，日本人の問題と関係づけられて取り上げられることがあります。大野晋先生が，岩波新書『日本語の起源』(1957年)の中で，日本語の方言の東西対立が日本民族の形成と関係があるにちがいない，といった見通しを述べられたことに触発されたものと思われますが，その後，民族学・考古学・人類学などの分野で，今もおりおり話題になることが多いのです。日本語に関する研究の中で，他の学問分野との関連で話題になる，数少ない例の一つと思いますので，この際ちょっと注意を喚起しておきたいと思います。

すでに述べたように，この方言区画論を日本の方言研究の中心に据えて唱導した方は，東条操先生という方でした。では一体なぜ，この東条先生が，方言区画論に執着を持ってきたかということについては，私は次のように考えています。

まず，東条先生が大学を卒業する頃，その『口語法分布図』が公にされて，その刺激を受けた。若い感受性の強い時に受けた刺激が，その後の一生を左右する，ということが一つあったと思います。

ついで，この先生が学問を始めた頃，比較言語学が言語学の中心にあったことも原因ではなかったかと思います。つまり，同一系統の言語は，分裂することによって，別の言葉でいえば，地域的に別々の発展を遂げることによって，様々な対立が発達したという，そういう考え方がこの東条先生の頭の中に，言語観として重要な位置を占めていたのではないか，と思うわけです。

それともう一つ，これは少し後のことになりますが，フェルディナン・ド・ソシュールの構造主義的な言語観，これが影響をもった。実はこの方言区画論と平行的に発達してきた，後で述べる方言地理学的な考え方に対抗するために，言語要素の個別的現象に拘っている言語地理学が，言語研究の主流とはなり得ない，言語を一つの統一体，組織体と考える方言区画論こそ，方言を研究する言語研究の中心になる資格がある，こんな考えがあったのではないか，と思っています。

また，この東条先生の頭の中に，日本語の時代的変遷を目安とした時代区分論がもしあるとするならば，それに拮抗する地域区分論の樹立を，自らの手でなしとげたいといった野心といったものがあったふしもあるわけです。

また，東条先生が少年のころ昆虫採集に関心を持っておられ（これは事実），学問の道に進まれたのち，生物区（生物の棲息状況からみた地域区分）に関心を持たれたのではないか，それが方言区画論を生む素地になったのではないかなどと，これは勝手に想像しています。

いずれにせよ，この東条先生の方言区画説が広く公にされたのは，1927年(昭和2年)のことでした。そして，その前の大正期は，方言研究の暗黒時代というふうにいわれています。

この1927年という年は，実は柳田国男先生の『蝸牛考』の初稿が発表された年でもあることは，忘れることができません。方言地理学の誕生です。

柳田先生は，国際連盟の委員としてジュネーブに在任され，その時にジュネーブ大学で聴講され，新しい学問の風に接しられたと言われています。また，アルフレッド・ドーザの“geographie linguistique”という本などをお読みになって，そこで述べられた原理をその日本各地のカタツムリの諸表現に適応したのが『蝸牛考』である，と言われています。

方言地理学という学問は，方言の地理的な分布が，実は時間軸に沿った方言の伝播，領域の膨張・収縮の反映であると考える。ゆえに，逆に現在の分布状況から過去の伝播を推定し，ひいては，過去の言語状態を推定する，というふうに簡単には言えると思っています。

ところでこの柳田先生は，安易な理解を拒む側面を持っていらっしゃったと思います。この柳田先生が『蝸牛考』に愛着を持っていらっしゃったことは確実で，二回原稿を書き改めて本にしていらっしゃいます。ところが柳田先生のお弟子さん達が，蝸牛方言以外の事象，殊に民俗事象について分布研究をすることを，極端に嫌っていらっしゃった，というふうに聞いております。これは普通ではちょっと考えにくいことです。ところが，破門の憂き目にあった人さえいるというふうにも聞いています。柳田先生のお気持ちの真剣さが，並々ならぬものであったとは，推測してもよいと思われます。

もし柳田先生が，方言地理学の方法，方言の地理的分布が歴史的展開の反映であるという，その解明の方法自体に興味があおりだとするならば，後を継ごうとする者を破門するなどということは，ありえないと私は思うのです。私なりの考えですが，柳田先生は，その方法よりもその結果，つまりカタツムリを現す諸表現の分布状況，つまり京都を中心とする周圏的な方言の分布状況そのものに愛着を持っていらっしゃったのではないか，と思うわけです。別の言葉で言うと，カタツムリ以外の現象について分布地図を作ると，また別のタイプの分布状況が現れるということを，柳田先生はすでに察知していらっしゃったのではないか，と想像してみるわけです。

京都を中心にして，デンデンムシの言い方が見られ，その外側にマイマ

イという言い方が分布している，さらにその外側にカタツムリ，またまたその外側にツブリ，そして一番外側にナメクジが分布している，これが柳田先生の『蝸牛考』の周圏論の骨子です。池に投げた石が描く波紋のように，新しい波がその前に発した波を外に押し出す。都で古く使われていた言葉が，新しい表現に駆逐されて外側に押し出され，次々に生まれる新しい言葉によって，方言が多重同心円的になって全国を覆うようになる。話は実は逆で，そのような分布状況が見られることから，逆に一番外側のナメクジを最も古いものと位置付け，そして，ツブリ，カタツムリ，マイマイの順で新しい。最も新しいものが中心にあるデンデンムシである。このように考えるのが，柳田国男先生の方言周圏論です。柳田先生は，そのような分布状況に深い愛着を持っておられたのではないか，と想像するのです。

私の想像は，ひとつには，柳田先生が他の事象の分布地図を作ろうとした弟子を破門なさったというううわさを根拠としていますが，他にもうひとつ，東条操先生の方言区画論を論難する，そのときの言葉遣いから，そのことが察知されると思うのです。柳田先生の『蝸牛考』第三稿（1943年）の序文には，次のような言葉が出ています。

「心得がたいことはこの周圏説に対立して，別に一つの方言区域説なるものがあるかのごとき想像の，いつまでも続いていることである。方言はその文字の示す通り，元来が使用区域の限られている言葉ということなのである。区域の認めない方言研究者などは一人だってあろうはずがない。ただ，その区域が数多くの言葉に共通だということが，一部の人によって主張せられ，他の部分の者が信じないだけである。今からざっと40年前，まだ方言の実査の進んでいなかった時代に中部日本のある川筋を境にしてた東と西とでは概括的な方言の違いがあると言い出した人たちが大分あった。これがもしその通りなら大きなことで，あるいは方言以上，もとは相似たる二つの言語というような結論になるかもしれぬのであったが，その推定を支持するような資料は，今になっても格別増加しておらぬのみか，むしろ反対の証拠ばかりが現われている。そうなってきてもよい理由が現

在はまだちっとも説明せられず，しかも事実もその通りではないのである。どうしてこのような想像説がいつまでも消えずにあるのかすらも，我々には不審なのである。これと方言周圏論とを相対立するものと見るような，大雑把な考え方が行なわれている限りは，方言の知識は「学」になる見込はない。きっとそうだという事実も立証せられず，また，そうなってきた経過も追究せられていないのに，それでもひとつの学説かと思うなどということは，およそ「学」というものを粗末にした話である。」

1943年は太平洋戦争中のことです。ともあれこのような激越な言葉は，方言区画論の主唱者東条操先生を，当然いたく刺激することになる。東条先生は戦争をはさんだ1950年の10月，刊行されはじめてまだ間のない雑誌『国語学』第 4集に「方言周圏論と方言区画論」論文を投じて反論していらっしゃいます。

今，その論点を全て紹介することはできませんが，東条先生は

「…この区画論で最も困難な問題は境界線の問題である。…一本の境界線の左右で判然と東西に分れるといふものではない。…しかし，方言の特徴を代表するいくつかの現象の境界線が，一線とはならないで，…相集まって束状をなして存在する事も事実である。…この境界線問題を理由として方言対立の現象を否定せんとするのは，森の一本一本の木は見ながら，森林の鬱然として厳存する事実を見ない類である。…私をして言はしむれば，かくの如き誤認は個を重んじ，全を軽んじた結果である。」と述べられています。

東条先生という方は小柄な方で飄飄とした感じの方であり，また，柳田国男先生を心から敬愛しておられました。しかし，専門のこととなると，さすがに迫力があります。東条先生の考え方と柳田先生の考え方とは，東条先生も実はそう考えておられたのですが，立場の相違であって，東条先生の言葉を引くならば，「方言周圏論と方言区画論とは，もともと別な立場から論じられたもので，…互に相容れないものではない。…同時に併存し得て矛盾しない二つの学説…」なのです。まあ，区画論側ではこのように考えていたのですが，では，柳田先生の側から，なぜ激越な口調で区画

論を論難なさったのでしょうか。以下は私の想像ですが，柳田先生は方言区画論の中に日本文化の多元性，悪くすれば，多元的発生説の匂いをかぎとられて，少なくとも自分の目の黒いうちはそれを撲滅せねばならないという風に考えられていたんではないかと思っています。逆に言えば方言周圏論こそ，日本文化の一元的な説明に有効であって，その邪魔になる考え方は積極的に否定しようとされたのではなかったかと思うのです。柳田先生は1875年のお生まれです。民俗学を通じて日本文化の一元化の証明を目指した，簡単には言えないかもしれませんが，まあそんなことを思うのです。分裂する芽は外国の侮りを受ける危険を秘める。もし，芽があるようなら，これは未然に摘み取らねばならないというお考えが，あったのではないでしょうか。区画論は危険な考え方である。さらに言えば分布研究一般にも危険がある。危険思想である。柳田先生のお考えが当たっているかどうかは別として，ただ単に言語学的な興味というのではなくて，柳田先生は日本または日本人ということを考えて，ご自身の方言周圏論を打ち出されたものと私は考えております。その危険も感じずに言語学的な研究を進めようとする者に対してご不満があって，そのような言葉が出たんじゃないかと思います。

さらにいえば，周圏論は，方言を卑しめるものがあるとするならば，名もない農村の人々の使っている言葉にこそいにしえの雅びが残っていることを知らせることになる。柳田先生は周圏論を通じて，卑しめるものを反省させ，方言を使うものを勇気づけるというようなことも，お考えになったのではないかと思っています。

既に20年か25年前になると思うのですが，柳田先生の極く身近にずっと長くおられた大藤時彦さんに，なにかの席で，柳田先生がなぜ他人の分布研究を好まれなかったのだろうかと尋ねたことがあります。その時，大藤さんが，「天皇制の関係じゃないかなあ」と一言洩らされたことが，私には非常に印象深く記憶されています。

方言分布図，ないしは方言区画論を扱う人の中に，方言地図と天皇制との間に，なにか関係があるかもしれないというようなことを一度でも考え

た人があったかといえば，それは誠に疑わしいと思うのですがどうでしょうか。本当に関係があるのかどうか，あるとすればどんな関係か，それはわかりませんが，そんなことを考えた人が，一方にはいたのです。

なお，柳田先生の方言周圏論は，方言区画論が他の学問分野に刺激を与えたのと同様に，これは主としてフォークロアの分野ですが，ある種の刺激を与えたと思っています。つまり，民俗周圏説といったものが成り立つかどうか，ということです。ソシュールの構造主義が他の学問分野に刺激を与えたことはよく知られていますが，それとは事情が違うにしても，方言研究も案外他の学問分野と関係があるのです。もっとも，民俗学の分野では，その後構造主義的な考えがとり入れられたりして，この民俗周圏論の議論は，十分に煮つめられたわけでなく，また，柳田先生があらゆる民俗事象について分布地図をつくることを好まれなかったこともあって，その後，どうも薄まってきたように思われます。

ところで，この1927年という年は，東条操先生の『国語の方言区画』という本が出て，区画論が初めて世に出た。同じ年に柳田国男先生の『蝸牛考』の最初の原稿が雑誌に載った。このことは既に述べたわけですが，この昭和の初期にあたって方言を対象とする研究がもう一つの大きな流れ，比較方言学が芽生えてきたことも忘れることができません。

まず，若くして亡くなった有坂秀世先生の『語勢沿革研究』がこの1927年から28年にかけて書かれました。早熟の有坂先生は当時旧制高校生で，自ら各地の方言アクセントを調べて，音韻対応に当たるアクセント対応を発見し，方言アクセントの系統図を書く準備が整ったというように書き記しておられます。そこだけちょっと引いてみますと，「東京アクセントと三重アクセントの間に極めて規則正しい関係が存することを知りえた…一定の関係を見出すことができたのみならず，それを目当として各地のアクセントの系図を編み，且，その年齢の順序をも推定し得るようになった」というように書いていらっしゃるのです。

ところがご存じのように，この『語勢沿革研究』という本は箱の中にしまってあって，刊行が非常に遅れました。1964年に初めて刊行されたので

す。

一方，有坂さんと同年の服部四郎先生は，有坂先生とは無関係に，ただし，ほとんど並行して，同じアクセント研究に関心をもつようになられました。おもしろい，しかも不思議な事実です。1927年，この年に服部先生はご自分のアクセントの分析をはじめられ，翌年の28年に，これは旧制の大学一年ですが，そのデヴュー論文を発表しておられます。服部先生のほうは論文がすぐ発表されたのですね。それにしても，有坂先生もそうでしたが，服部先生もほんとにませた方だったんですね。その後服部先生のご活動はめざましく，1931年に「国語諸方言のアクセント概観」，また32年に「“琉球語”と“国語”の音韻法則」などを発表して，比較方言学の大筋を示されることになります。簡単に申しますと，比較方言学は比較言語学の日本方言に対する適用です。音韻対応を軸に言語の系統や歴史を研究する学問ですが，それを日本語の方言に適用しようというわけです。

この比較方言学の考え方は，世に発表されると，たちまち当時の若い人達を大いに刺激しました。平山輝男とか，あるいは金田一春彦といった人達を産み出すのです。殊に，金田一春彦氏はその卒業論文を元にして「現代諸方言の比較から観た平安朝アクセント」，1937年ですが，それをひっさげて華やかにデヴューします。今読んでも非常に分かりやすい，若い方でまだ読んでいない方は，読んでみることをお勧めしたい論文です。

国語調査委員会の音韻や口語法の調査が標準語の問題を解決するためにスタートしたということ，また，柳田先生の蝸牛考が，推定ではありますが，日本文化の一元性を説明するために書かれたということと比較して，この比較方言学は，純粋言語学的な観点からその研究が推進されたといってよろしいかと思われます。知的興味と言っていいかと思いますが，もっとも，服部先生は高校三年の時に安藤正次先生の『言語学概論』というものを読んで，「日本語の系統が明らかになっていないということが書いてあったのが私の心を捉えた」，などと述べておられます。ですから，学問推進の原動力として，この先生にある種のロマンティシズムの香りを窺うことができるのかもしれません。

この，1927年あたりから1937年，あるいは，もう少し後あたりにかけての昭和初期は，日本の方言研究にとって異常な高まりを見せた時代と言っていいかと思われます。新しい研究の芽が一斉に吹き出しました。先ほど述べた平山とか，金田一とかいう人達の活動が始まった時期でもありますし，広島の藤原与一氏なども，この時期にデヴューした方です。沖縄の方言について言えば，その研究の開祖である伊波普猷氏や宮良当壮というような方たちが活躍した，誠に活気のある時代です。

言語学関係の雑誌として，『方言』がありました。全国的な背景のもとに，1931年から1937年まで，たったそれだけですが，また，たかだか500部ぐらいしか出ていなかったのですが，毎月刊行されていた活版の雑誌がありました。今から考えても，誠に不思議な時代だったのです。その他，各地でミメオグラフではありますが，何種類かの定期刊行物が発行されていました。

ひるがえって，当時の日本には，世界を敵とする戦争が刻々と近付いていたのです。また，外国に目を向けるよりも，日本の内部を見つめ直してみようといったナショナリスティックな気持ちがあったようです。さらに極端な不景気が訪れていて，農村の疲弊は甚だしく，一部の人々に地域の問題を見直そうといった，気運が生じたものと思います。そして，ついに日本は，戦争に突入していくことになりました。

1945年前後，人々はもはや方言研究を具体的に行うというような余裕はなくなっておりました。柳田の『蝸牛考』，第三稿は1943年，また東条操の『方言と方言学』の改定版は1944年に出るなどという，そういうことも確かにありましたが，実際の研究を行なうことなど，できない時代でした。

しかし，当時幾つかの新しい言語問題が，現実に発生していたことも，また事実だったろうと思っています。各地の人たちが，戦場であるとか，軍需工場などに駆り立てられて，現実的には，使用言語の行き違いが新たに起っていたのではないかと思われます。沖縄戦にあたって，本土の人にはほとんど理解できない，聞き分けられない沖縄の方言を使う者は敵方に通ずるスパイであるとして，処刑されたというような話も聞くわけです。

爆撃を避けて都会の小学生たちが各地に疎開して，そこで土地の生活言語を使えない都会風を吹かせている者としていじめられたなどという話は，枚挙にいとまがありません。しかし，そんなことにかまっていられない，そんなことに，いちいち対応などしていられないといった，本当にみじめな，恐ろしい時代でした。

方言のことではありませんが，韓国，台湾の人々の苦労は，さらなるものがあったでしょうし，また，戦場となった東アジア，東南アジアの各地で，いろいろな日本のからむ言語問題がいくらでも発生していたに違いないと思われます。そして，それらを押し流すように，日露戦争の勝利から40年を経た1945年，日本は敗戦を迎えることになります。

敗戦後の2，3年は方言研究どころではなく，繁栄の現在からは全く想像のつかない混乱の時代でした。海外に出ていた兵士たちは，その全てが敗戦直後に帰郷したわけではありませんでした。大都会は焼野原であり，かりに大都会に本籍があっても家はなく，また，配給制度の制限などから，都会に住むことについて，個人には自由のなかった時代です。町には親を失った孤児が集り，一般人も着るもの食べるものが極端に不足し，人々はその調達に駆けることになるのです。皆痩せこけてボロボロの服を着て，家のない者は大学の研究室に寝泊まりする，今でも，酔っ払って寝泊まりする方もあるかもしれませんが（笑），そういう時代でした。そうした中で，敗戦から数年を経過して，徐々に方言研究の復活が見られるようになります。そして，従来の研究をさらに進化発展させる方向の他に，方言研究の分野でも，それ以前といささか違った局面が展開してきました。そのひとつが，記述方言学の分野です。まず，音韻分析の面から開花していったといっていいでしょう。1948年2月，まだ国語学会が自らの雑誌を刊行できずにいて，ミメオグラフの会報を発行していた頃ですが，最も早いものとして，服部四郎先生の「音韻体系について―新潟県の一方言を例として」が注目されます（『国語学会会報』）。これは1947年11月22日に口頭発表されたものの記録です。方言研究は，誠に地味な分野と考えられますが，こうした最先端とも言うべき研究が，方言をフィールドとして行われ

た点に注目しておきたいと思います。新潟県南魚沼郡中之島村姥島というところの方言を扱ったもので，いわゆる開合の別のある方言ですが，その後一世を風靡した音韻論の魁となった発表です。もっともこの記述言語学の方法は，何も方言研究独自のものとはいえず，たまたま方言を具体的な対象として扱ったものに過ぎないといえるかもしれません。従って方言を扱った記述言語学研究は，その後，さらに生成文法などの視野からの研究を含めて，いくつか目につきますが，また，阪大関係の研究者の中にもたとえば村中淑子さんのようにイントネーションの記述を探求しておられ，そのほかにもこのあたりに位置付け得る方が何人かいらっしゃるかと思いますが，以下省略に従うことにさせて頂きたいと思います。

服部先生を巡っては，1950年代に，別にグロットクロノロジー，言語年代学を方言に適用した研究などもありますが，これも時間の関係から省略させて頂きたいと思います。

戦後の方言区画論については，まず1940年代の終わりから1950年代にかけて，まず，都竹通年雄，奥村三雄，大岩正仲などの方々による新しい区画説が現れてきたことに触れなければなりません。東条先生の区画説は，実は，どこか不透明なところがありました。対してこれらの新しい説は，その辺を突いている，ということができると思われます。そしてその総括として，1964年に，東条操先生の80歳をお祝いして，『日本の方言区画』なる論文集が刊行されることになりました。この論文集には各研究者の当時の最新の区画説がいろいろ載っています。もしその中から特徴のあるものを一つだけ挙げるならば，金田一春彦先生の区画説がそれであろうかと思われます。

まあ，脇道にそれますけれども，この『日本の方言区画』なる論文集の刊行を機会に，日本方言研究会が発足し，現在も活動をしてます。ですから，来年が30周年ということになりましょうか。

さて1990年代を迎えて，現在は情報処理技術の開発などもあって，方言区画論は新しい技法の開発線上にあるといえます。そういう分野で頑張っている人をたった一人だけ挙げろといわれるなら，東京外大の井上史雄さ

んで，阪大関係者から名を挙げるなら，ダニー・ロングさんの研究が，将来注目されてゆくのではないかと思っております。

私自身は東条操先生に教えを受けた人間です。しかしこの方言区画論に対しては，ほとんど貢献していない，というのが事実でしょう。正直なところ，伝統的な方言区画説の流れには，ちょっとのめり込めない気分がありました。そのひとつは，本土方言の東西対立がよく議論されますが，私には日本全体を見渡すと，もっと大きな方言差があるのではないかと直感されるのです。具体的に申せば，琉球方言と本土方言の差の方が，ずっと大きいのではないかということがあります。この点は最近，真田先生もそんなことを書いておられるのをちらっと見た気がしますが，それじゃ，何故東西対立が従来からよく議論されるのかということを，あらためて考えてみる必要があるような気がします。それにはそれなりの理由があると思いますが，私にはそこに何か都会人の思い上がりがある，上方と江戸の対立のみに心がひかれていく，九州の人とか東北地方の人などの気持ちに対する無視，あるいは，蔑視があるような感じがするのです。「違う」といわれればそれっきりですが，そんな感じがする。それから，東条先生とか大野先生とか，私はこれらの先生方に教えを受けたわけですが，先生方が取上げられるので，まあ，きれい事で言えば「師説になずまない」，別の言葉で言えば，その先生たちと違った事を言いたいというか，なんかそんな気持ちもあって，方言区画説に近づかないのかもしれません。

それから東条先生の議論が明示的でない，不透明性がある，ということを申しましたが，そんなことも，この方言区画論が魅力的でないと感じた理由の一つでして，その点，都竹通年雄氏，奥村三雄氏らのものは，それなりにすっきりしているわけですが，何しろそこで利用されている資料はまことに貧弱で，議論はともかく，その結果は，信憑性が薄い，というふうに考えておりました。

そうした中で，全国を展望できる新しい資料として出現した『日本言語地図』，これを利用した五条啓三さんの論，「『日本言語地図』を利用した語彙による日本語の方言区画」（1985年）は注目すべきものと私は思っ

ております。現在はさらに新しい資料として，『方言文法全国地図』，あるいは『日本方言大辞典』，『現代日本語方言大辞典』などが刊行中，ないしは完結しております。さらに新しい展望が開けてくることが期待されると思っています。

戦後の研究について，次に方言地理学の事を述べる順番かとも思われますが，順序を変えて比較方言学について先に言及したいと思います。比較方言学という名は，そもそも秋田大学にいらっしゃった北条忠雄先生という方の命名によるといわれています。そして，この分野ではなんといっても，アクセント研究を中心とした金田一春彦氏の活動が目立っています。もっとも，この金田一先生の論の進めかたについては批判もあるようで，服部四郎先生などは，こんな所で大きな声で言うべきではないかもしれませんが，「金田一君は比較方法を理解していない」などと，極言されたこともあるようです（笑）。まあ，近親憎悪みたいなもんかなあ，とも思っておりますけれども（笑）。

なお，私としてはこの分野にほとんど貢献していませんが，以前，わずかに発表したものがあって，その発表が香川県の西側に浮ぶ伊吹島の方言アクセントを，日本全体を見渡してもそこだけの，珍しいアクセントを引き出すのに効果があったかもしれないなどと，密かに思っている次第です。今思うとその発表は，実は有坂先生が以前言われた「アクセント間の関係を目当として，各地のアクセントの系図を編み，且，その年齢順序を推定し得るようになった」と言われたそのことを，単にやや資料をふやして具体化しただけだったのかもしれないと，いまは思っております。アクセントの比較方言学的研究は金田一先生既に80歳になんなんとして，もはや次の世代の，例えば，上野善道氏らの世界となっていくのではないかと思っています。私にとっては，そのほか静岡の山口幸洋氏のお考えなどに魅力を感じています。極めて小さなもので，また金田一先生は，あまり感心なさらなかったようですが，『国語学』に載っているＥＳ生氏，実は真田信治先生ですが，「外来語アクセント対応について」などは，比較方言学の大切な急所を突いたものとして，きわめて深い関心をもっております。

琉球方言の比較方言学的研究者としては，服部先生を継ぐ者として，これもまた一人だけ挙げろと言われるなら，都立大学の教授の中本正智氏であろうと思います。しかし，この頃何か健康を害しておられるように伺っていて，心配しております。比較言語学は比較文法とも言われています。この方法を駆使して，ついに日本祖語の文法の再構にまでいけるといいのですが，さてその見通しはどんなものでしょうか。琉球諸方言ぐらいではその資料が足りないのでしょうか。比較言語学は言語学として非常にオーソドックスな研究です。さらに発展深化することを望んでいますが，この阪大の日本学としては，そこにおられる新田哲夫さんや，院生の大和シゲミさんあたりが，それを発展させてくださるんじないかと思っている次第です。

さて後回しになった方言地理学ですが，この分野が自他ともに認める，というか，それしかできないというか，私の専攻分野です。実は，大学在学中には，先ほど述べたように，方言地理学を重んじられない東条先生の指導を受けていたこともあって，当時は琉球方言，殊に奄美大島方言の音韻分析なぞをさせて頂いていました。そしてその後，その御縁もあって九学会連合の奄美調査にも参加させて頂きましたし，また最初のフィールドワークの体験としては，これは柳田国男先生の，当時民俗学研究所というのがありまして，そこの共同研究の一環として，宮古島に行かせて頂きました。そして，1955年の6月，修士課程を卒業したその年に，たまたま欠員が生じた国立国語研究所の地方言語研究室に採用して頂きました。そして，方言地理学の世界へと，次第に入ってゆくことになったのです。

当時の地方言語研究室は，柴田武室長，そしてその後国語研究所長となられた野元菊雄さん，現在琉球大学教授の上村幸雄さん，そのお三方と私の四人で構成されていました。当時の研究室の体制は，1955年頃から1964年まで，柴田さんが東京外大に転出されるまでの9年間，全く変わりませんでした。当時の研究室の研究テーマは，研究員の一人一人が別々のものを中心となって分担し，他はそれに協力するという形を取っていました。野元さんは既に調査完了ずみの，敬語と敬語意識の報告書の作成にかかっ

ていました。それが終わってからは，北海道の共通語化の調査の一員として研究を続けておられたわけです。上村幸雄さんは一貫して沖縄語辞典の編集にかかっておられました。そして私はちょうどそのころから準備調査のはじまった「日本言語地図作成のための研究」を，前任の北村甫さんから引き継いで分担するということになったのです。柴田さんは「各地方言の記述的研究」，1959年に刊行された，あの報告書のまとめをなさりながら，研究室全体を統括しておられたといえばいいでしょう。

そしてこの「日本言語地図」については，私はその準備から完結まで，1955年から1975年まで，20年間首尾一貫しておつきあいをした，つきあわせていただいた，といえるかと思います。明治の国語調査委員会の調査に続く，完結した時で比較するとちょうど70年後になりますが，それに匹敵する，あるいはそれ以上の大規模な方言調査ということになります。

このプログラムの推進については，所長の西尾実先生，それから研究室長の柴田さんは乗り気であったのですが，その中間の研究部長であった岩淵悦太郎部長は，批判的であったということを思い出します。国語研究所の設置目的と考え合わせて，お悩みがあったものと思われます。それから当時の国語研究所の評議員であった中島健蔵氏のバックアップが随分あったということを聞いています。国立国語研究所には，地方研究員制度というものがありますが，その制度の活用の為に，この調査計画がたてられたといった面があったとか，そんなことを耳にしたこともあります。私が国語研究所に入る前の話です。

ちょうど豊岡から東京に移って来られた方言地理学者のグロータース神父から陰に陽に支援を受けたこと，それから当時まだ米軍の統治下にあって行政的には本土と切り離されていた沖縄地方を，本土と全く区別なく，平等に調査地域に加えることが出来たことなどが思い出されます。国の機関の末端ではありますが，本土と沖縄に全く同じ計画を適用したのはこの「日本言語地図作成のための調査」が初めてだとか，きちんと確かめたことはありませんが，そんなこともありました。思い出せば，きりがなくいろんなことが出て来ます。

調査項目に当時の構造意味論を反映したものがいくらか加わっている特徴がある，などということもいえるかと思います。貧しかった日本も，ついにこの様な大規模な方言調査が出来るようになった，そしてこのような大冊を刊行して世に受入れられる時代になった，ということをしみじみ感じたことを思い出します。ただ1955年から数年間は，「日本言語地図」に関してはただただ資料を集めるという時代で，その結果を使っての研究というところまでには至っていませんでした。その後，「日本言語地図」の「解説」やそれをめぐる論文も出たし，『日本の方言地図』（中央新書）なども出ましたが，現在はその結果を利用した研究は，当時その調査とか地図の作成に参加した者達より，むしろそれより一世代若い人達，国語研究所の小林隆さんとか，フェリス女子大学の安部清哉さんなどによって行われています。まあ，阪大からもそれに続く人がこれから出るといいなあと思ったりしています。

私が方言地理学に最初に目を開かれたのは，この「日本言語地図」よりむしろ1957年から1961年まで，隔年で3回行われた新潟県の糸魚川地方での調査でした。私にとっては昨日のことのように思い出されますが，若い皆さんにとっては，なにか大昔のことのように思われるかもしれません。最初の人工衛星スプートニク1号がはじめて打ち上げられて，そのニュースを糸魚川の旅館で聞いた頃のことです。

調査結果を白地図の上に記入して，そこに浮かび上がって来る方言分布を，刻々と目の当たりにすることが出来て，それをはじめて見，方言というものはこういうものであったのかと，私は都会育ちなものですから，文字通り目から鱗が落ちるといった体験をしたのです。

日本の方言地理学は，柳田以降，1957年の糸魚川調査をもって，大げさにいいますと復活したというか，第二世代を迎えたと言ってよろしかろうと思われます。この糸魚川調査について思い出すことをいくつか申しますと，この調査は，建前としては，調査地点番号をどのようにつけるか，どれほどの精度，詳しさでつけたらよいかということを調べるための調査という形で，スタートしたのです。そして，結果として，方言調査基礎図の

番号システム，国研方式と俗に言われているあの方式は，ここからスタートしたのです。研究費は，そういう形で申請されたのですね。それから，グロータース神父の指導が非常に大きかったということを，何遍でも言いたいと思います。もしグロータス神父がおられなければ，あの調査はきっともっと矮小化したでしょう。それから，三回同じ地域で調査を行ったということ，前に調査したことをふまえて次の調査方法とか次の調査項目を決めたこと，これがよかったと思っています。最初は柴田武，グロータース，私の3人でスタートしたのですが，最後の年に馬瀬良雄氏が加わりました。

この調査を通じて，私は，言語と言語外の条件を併せて考える必要があることを痛感しました。これは私にとり非常に大きなことでしたね。もっとも，方言地理学は，元来，地理的環境の中でことばを捉らえようとするのですから，あたりまえといえば，あたりまでのことですね。

そしてこの糸魚川調査では，いくつかの新しい試みを適用させていただきました。馬鹿馬鹿しいようなことですが，同じ項目，同じ質問を，時を隔てて調査して，その結果に差が出るかどうか調べてみる。それから同じことを調べるのに質問文を変えてみる，質問方法を変えることによって，その結果にどんな差が出て来るかということを試してみました。分布調査は，原則として各地点一人ずつ，180地点でしたが，男の60歳以上の老人にあたって調査したのです。そしてある特定地点については，その集落に住む人全員，男も女も，年とった人も若い人も，全数調査を行なって，地点内の言語差，住む人による言語差と，分布地図の上に現れている言語差がどういう関係にあるかということを調べてみました。梨の木という集落でしたね。また，ある表現の使用圏の地図をつくってみると，ある言い方がこの範囲で使われるということがわかって来ますが，その外側，別の言葉が使われている地域で，じゃ，その言葉を知ってるのかどうか，そんなことを調べたり，理解語の分布を調べるということですが，いくつかの新しい試みを提案し，それを実施したことを思い出します。

今考えると，以上のいくつかは，全てそれぞれの地点の言語の状態がそ

う簡単ではない，単純なものでないということを前提としたアイデアを基礎にしています。元来，方言地理学は，地域差を調べるものではありますが，それぞれの地点からの話者の回答は，それなりに安定したものであるはずだというふうに暗黙のうちに思われてきました。不安定だとすれば，それは調査のやり方が悪いのだ，と考えられてきたふしがあります。ソシュールの言語観，langueの存在を前提とする言語観が主流を占めていたために，そういう見方が，必要以上に誇張されることがあったんだろうと思われます。しかし調査のやり方が悪いとか，話者が不適当だったとかでは片付けられない問題があるというのが本当のところでしょう。言葉の実態はそう単純なものではない。例えばグロータース神父などには，全集落調査，しらみつぶし調査，ある地域に集落が180あるならばその全部を調査する。それが方言地理学調査の究極のものであって，そこまで行けば理想である。そこまで行かないものは行くように努力すべきである，というようなお考えがあったようですが，そうでもない，私には，それ以上の細かい複雑な世界があるように考えられたわけです。

この辺りに，私が在来の方言学から社会言語学への脱皮する契機があったように，思われるのです。もっとも，これは実は，当り前のことであって，個人の内部でさえ，言語は単純ではありません。まして，複数の人の集合体である地点の言語状況，1地点の言語状況が複雑であって当然なのです。なお，糸魚川地方の言語地理学調査の結果の発表されたもののうち最も古いものは，柴田武氏の「方言の古い層と新しい層」（1958年）ですが，ここには地点内部の，具体的には話者個人の言語意識の差を利用して方言地図の解釈を行うということが示されているわけですから，この糸魚川地域の調査には，方言学が社会言語学へと展開していく種子が初めから内包されていたといってもよろしかろうと思われます。

私の方言研究と社会言語学との接点を示す研究のさまざまなアイデアとその成果は，その後，日本言語地図作成期に実施されていた国語研究所の検証調査の成果として，『方言の諸相』（1985年）の諸論文に反映していることをご紹介しておきたいと思います。一つだけ具体的な話題をとりあ

げるなら，現在時々使っていただいているグロットグラムという言葉は，この検証調査の中から生まれてきた術語です。

ここで戦後の方言地理学について，言い落した点をいくつか補っておこうかと思います。方言地理学の分野は入りやすいためでしょうか，1950年代半ば以降から今日まで，不思議に盛んに行われています。代表的な著作としては，広島大学の藤原先生を中心としたグループの『瀬戸内海言語図巻』にまとめられた研究，あるいは，広戸惇先生の『中国地方五県言語地図』などは，日本言語地図や糸魚川地方の方言地理学調査とほぼ同時に始められたものです。そのほか，公表されたものとして，新潟大学の大橋勝男氏，それから元信州大学の馬瀬良雄氏，高知女子大の高橋顕志氏らの大著がこれに続いています。近年は，コンピューター利用の資料処理を考慮した方言地理学が盛んです。また，国立国語研究所では『日本言語地図』に続く，『方言文法全国地図』の刊行が進行しております。

それにしても，今や1990年代，20世紀も終ろうとしている現在，伝統的な方言の衰退のことを考えますと，伝統的方言を基盤とした方言地理学研究は，もう20年たつと大正生まれの人もいなくなるという時代ですから，必然的にさびれてしまうのじゃないかなどと思ったりしています。

関連して，つい最近，阪大文学部紀要として刊行された渋谷勝己さんの「日本語可能表現の諸相と発展」は，方言地理学研究の一つと言ってはご当人はご不満かもしれませんが，その第3部を中心に据えるならば，一つの典型的な研究成果と言うことが出来ると思います。以前大野早百合さんの通ずる研究がありますが，こうしてこの阪大に点じられた大きな光を，できるなら若い人達に受け継いでいただくといいと思っています。院生の井上文子さんなどに期待したいんですが，方言地理学者に分類するとご不満があるかもしれません。

さて，私の中で，社会言語学的観点がどのように育ってきたかということについては，すでにちょっと述べました。結局それが，「方言学から社会言語学へ」という今日の題の一つの側面にあたるわけです。

以下，日本の社会言語学的な研究が，どのように展開したかを見ていく

ことにしましょう。この話の最初に，regional dialect的な観点で見ると断りましたが，以下は，気分を変えて，social dialect的な観点を正面に押し出して展望する，ということになろうかと思われます。

まず，古いものとしては，突然ですが，清少納言の『枕草子』です。そこには次のような言葉が見られます。「おなじことなれどもきき耳ことなるもの，法師の言葉。をとこのことば。女の詞。下衆の詞にはかならず文字あまりたり。」すなわちここでは，職業，性別，階層による言葉の違いが指摘されているのです。「ことばなめげなるもの（言葉の礼儀を知らぬ人） 宮のべの祭文讀む人。舟漕ぐ者ども。雷鳴の陣の舎人。相撲（スマヒ）。」なんか，最近，貴ノ花が女性に対して無礼な発言をしたとかという話がありますが，お相撲さんは昔から無礼な言葉を使うらしいですね。このような記述は，探せばまだいくらでも拾うことが出来ると思います。『枕草子』には，「文ことばなめき人こそいとにくけれ。さるまじき人のもとに，あまりかしこまりたるも，げにわろきことなり。」などというのもあります。丁寧な言葉を使うべき相手でない人に向かって馬鹿丁寧なことを言うのはおかしい，ということです。書き言葉の敬語を巡っては，いわゆる雲州消息，明衡往来といいますか，それ以下のいわゆる往来物が問題になってくるわけでしょう。標準語意識に関しては，1650年の「片言」のことを，先ほど述べました。以上は昔の話でしたが，案外，いろいろな問題を拾うことができるわけです。

以下，平安時代から急に明治以降に突入しますが，社会言語学の前史については，さらに探求すべきことが多いと，痛感しております。さて，明治に入ると，いわゆる方言観が，江戸時代と大きく変わったことを，さきほど申しました。標準語の問題が大きく表面に現れて来ます。どういう標準語を認定するかを巡って口語法が論じられたことは既に触れましたが，さらに，書き言葉について，標準文体の問題，具体的には，言文一致体を使うのか，あるいは，普通文を使うのか，それから，標準表記の問題などがあれこれと論じられました。標準表記というと，漢字制限の問題，漢字仮名混じり文とすれば，送り仮名の問題，漢字廃止ならば，仮名なのか，

ローマ字なのかの問題，また，仮名遣いの問題などがあります。そのほか縦書き，横書きとか，分かち書きの問題なども，ここに加わって来るだろうと思います。そして，それらの一つ一つの具体的な問題については，20世紀も終ろうとする現在，まだ最終的な決着がついているとは思えないのが実情です。

敬語の問題も社会言語学上の大きな問題です。江戸時代には，方言書はあるんですね。方言と中央の言葉を対比する本が，かなりたくさんあるのです。ところが口頭語の敬語に関する本は，各種問題をはらんでいましたから，また現実の社会生活上の大切な話題ですから，たくさんありそうなのに，全然思い付かない。どうしてそういうことがあるのかと首を傾げるのですが，どうなのでしょう。それに対して，近代社会に入ると，山田孝雄の「敬語法の研究」以下，現在も多くの人によって，いろいろな角度から研究が続けられています。待遇表現の形式にどんなものがあるか，待遇表現のシステムがどんなふうになっているかという研究のほかに，今後はそれがどのように使われているかというような研究が，さらに深められるべきでしょう。どんな形式があるかがわかっても，それをどのように使うか，それが難しいのですね。江戸時代に敬語書のない理由のひとつは，もしかするとこの言語使用のレベルに達することが難しいという事実の反映かもしれません。阪大関係者としては，前に助手をしていた宮治さんなどが，この方面の研究を補い，将来深めてくださることを期待しております。

こうした社会言語学の流れの中で特に注目すべきは，菊沢季生という方の「位相論」という考えです。菊沢氏は元来は自然科学方面の研究者だったということですが，言語使用者の属する社会集団の違いや，使用場面の違いにともなって現れる言語の変異相を，「位相」という言葉で表しました。いちはやく，1933年に『国語位相論』という本を著して，世に問うていらっしゃいます。位相論をめぐる具体的な研究は，その後，隠語の研究とか，女性語の研究とか，廓言葉の研究とか，児童語の研究とか，特殊な分野の，しかも特殊な語彙の探求に重点がおかれ，いわば，矮少化してしまいましたが，今後大いに見直され，発展さるべき可能性をもっています。

真田先生の「位相という用語について」（1988年）などは，この「位相」という言葉について，大切な指摘をしていらっしゃいます。また，関連して，時枝誠記先生に「国語における変の現象について」（1949年）があります。注目する人が意外に少ないのですが，あわせて忘れることが出来ません。

一方，1948年，国立国語研究所が設置されて，その活動が日本の社会言語学に大きな影響を及ぼすようになりました。既に，『敬語と敬語意識』について，ちょっと紹介いたしましたが，それに先だって福島県白河地方をフィールドとした『言語生活の実態』（1951年），山形県鶴岡をフィールドとした『地域社会の言語生活』（1953年）などがあります。後者を例にとれば，まずこの研究が，日本の言語生活改善のために行われたということ，このことに注目すべきかと思います。方言から共通語へと移る条件を明らかにしようとした500名以上の人を対象とした，大規模な社会調査によっているということ，語彙・文法・音声の各方面にわたって，言語使用者の性別・年齢・学歴・職業・階層・居住歴・社会的態度などとの関連を考慮して調べている点に特色があります。すでに名前を挙げた柴田武とか野元菊雄とかいう方達が研究分担者となっています。従来の方言研究の範囲のみにとどまらず，今日の題目の「方言学から社会言語学へ」という流れの中の，一つの魁となる研究と言えましょう。別の言い方をするならば，私が言う方言区画論，方言地理学，比較方言学に加えて，国語研究所のいわゆる言語生活研究を通じて，さらに第４の柱として社会方言学が誕生したと言えるかもしれません。先ほど申しましたように，私が入った国立国語研究所の研究室の名前は，方言研究室ではなくて，地方言語研究室でしたが，そこには，従来の方言研究から脱皮したい気持ちがあったと考えています。国語研究所の社会言語学的研究は，今日まで同研究所の大きな研究テーマの一つになっています。ただし，私のひがめかもしれませんが，調査法とか結果整理の精密化に重点がおかれて，問題意識の陳腐化が進み，理論的深化がやや軽んじられているんじゃないかと思いますが，皆さんは，どうお考えでしょうか。

なお，言葉を巡る社会調査としては，これらに先立って，「日本人の読み書き能力」の大規模な調査があったことを，付け加えておこうと思います。実は，この調査が，国語研究所の研究の引き金になったといって，過言ではないと思うのです。この辺りの研究者としては，阪大日本学出身者として，尾崎善光さんあるいは田原広史さんなどの名前がまず思い浮かんできます。

現在の日本の社会言語学，ないしは，それに準ずる分野の関係者としては，結構多くの方たちが活動していらっしゃいます。阪大日本学に非常勤としてお招きした方々を五十音順に挙げてみると，井出祥子，井上史雄，國広哲彌，寿岳章子，鈴木孝夫，田中克彦，橋内武，比嘉正範，本名信行などの方々が浮んで来ます。さらに，津田葵，ネウストプニーなどという方々は，それらに準ずるといえるでしょう。津田先生は言語文化部の先生であられますし，ネウストプニー先生はすでに２，３回，この大学に顔を見せてくださったことがあります。そういえば，フロリアン・クルマス先生も，この大学を訪ねてくださいました。それぞれ，独自の研究を深めていらっしゃる著名な方々です。今お名前を挙げた先生の中で，比嘉先生はバイリンガリズムの研究をなさった方ですが，本学出身の生越直樹さん，任栄哲さんなどもその分野の業績をお持ちでいらっしゃいます。ことばの差別などの社会問題と連動して，寿岳さんをお招きしたかと思いますが，阪大の関係者としては，野呂香代子さんなどがそういった点を深めてくれる人ではないかと思っています。

こうした中で，私個人は，すでに述べたように方言研究，特に方言地理学の発展として社会言語学の世界に入って来たのですが，もう一つ，さきほど真田先生にご紹介いただいたように，1975年に国立国語研究所からこの大阪大学にやって来て，予期せぬことに多くの留学生の方々と接するようになりました。そして，それが社会言語学へのひとつの刺激となったのです。どの留学生も，阪大に来られただけありまして，すばらしい日本語の使い手です。しかし，失礼ながら日本原住民である我々と比較して，日本語の使い方について，人一倍苦労しておられるようにお見受けするの

です。この状態は，不正確な言い方になりますが，日本語についてのコンピテンスに関する知識は十分だけれども，そのパフォーマンスについて，人知れぬ苦心があるらしいと言い換えることができるんじゃないかと思っています。別の言い方をするならば，日本原住民なら自然に乗り越えられるバランス，言語自体と，それを支える言語外の社会的条件とのバランスをとるのに，留学生たちは苦心をしておられるのではないかと思うわけです。

社会言語学とは，定義はさまざまですが，ごく簡単には，言語とその変異相，それをどのような言語外の条件と関連づけて，適切に運用するか，底に流れている原理を探究する学問と言っていいかと思われます。つまり私は，阪大に来て留学生たちと接することによって，今後のわれわれは，日本語に関する以上のような問題に，取り組んでいく必要性を痛感したのです。そして，その研究が，ついには日本語を学ぶ，日本語を母語としない人達の役に立つに違いないと考えるようになりました。

以上のような立場に立つことによって，我々は日本国内，日本語の問題にとどまらず，留学生の出身地域にまで視野を広げて，研究対象と考えることが望ましいということになります。タイならばタイにおける社会言語学的研究，韓国なら韓国における社会言語学的研究にまで手を広げる，また，日本とタイ，日本と韓国におけるパーフォーマンスの対照研究を行なうことが望ましいと思うのです。そしてそのあたりについては，私などがやらなくても，すでにその辺にいらっしゃる留学生の方々，カノックポーンさんであるとか，彭国躍さんであるとか，曹偉琴さんであるとか，中水エレンさんであるとか，黄鎭杰さんであるとか，あるいは卒業していった宮本マラシーさんとか，張相彦さんとか，留学生の方々がそれぞれの立場から着々と研究を進めてくださっているのです。誠に心強いと言わなければなりません。

阪大の社会言語学講座は天下唯一の講座です。今後の大学の制度改革がこの講座にどのような影響を及ぼすか，もう私の知ったことではありませんが，広範な研究対象をカバーしながら，必ずや，将来大きく発展してゆ

く，また，発展してゆかなければならないと，確信している次第です。

繁簡よろしきを得ず，このあたりで私の話を終わりますが，話の中で阪大の卒業生，あるいは在校生の方の名をいろいろ挙げました。軽々しいことで済まないことでしたが，私の名前が出なかったじゃないかという方もおありかと思います。総括のまずさというか，あがっているためとか，その他いろいろなことが原因かと思いますが，今後のご研究によって，私の蒙を開いて頂きたいと思っております。

さて，最後の謝辞に移ろうと思います。私は，この阪大に参りまして，優れた先輩あるいは同僚，院生，学生，あるいは，事務の系統の方たちに接することができて，かけがえのない体験をしたと感謝しております。いろいろな勉強をさせていただきました。幸せでした。本心から嬉しく思っているのですけれども，皆様方にとっては，あるいは迷惑に感じられたこともあったのではないかという気も，しないではありません。なんとお詫びしてよいものかと，思っております。今日もつまらぬ長話を聞いて頂いて，途中で出るに出られず，困ったという方もあったんじゃないかと思うわけです。けれども，結局は時の流れがそれらを押し流してくれると思っている次第です。

この阪大社会言語学講座は，今後真田助教授が中心になって支えていってくださるに違いないと，これは大船に乗った気持ちです。

ほんとうに，ありがとうございました。

（学習院大学文学部教授）

〔付記〕

以上の文章は、1993年3月10日に行われた徳川宗賢教授の大阪大学における最終講義の内容である。（編集部）